



ライフストーリー研究に
何ができるか

桜井厚・石川良子編

対話的構築主義の
批判的継承

ままならぬ対話から 見えてくるもの

インタビューをあくまで相互行為の場として捉え、
語り手の経験を理解し社会を読み解く「対話的構築主義」。
どのような対象にも有効なのか、対話形式の引用や自己言及的な記述の意義は何か、
いかにして語りの豊かさを引き出すのか……
あらためてその実践を捉え返し、調査経験から新たな可能性を示していく。

新曜社

ライフストーリー研究に
何ができるか

対話的構築主義の
批判的継承

桜井厚・石川良子編

新曜社

ライフストーリー研究に何ができるか

*

目次

序 章 **ライフストーリー研究に何ができるか**

石川良子・西倉実季

I

- 1 「ライフストーリー」から「ライフストーリー」への転回 I
- 2 ライフストーリー研究の基本的枠組み 3
- 3 ライフストーリー研究はどう受け止められたか 8
- 4 本書の構成 13

第1章 **モノログからポリフォニーへ**

——なにが私を苛立たせ、困惑させるのか

桜井 厚

21

- 1 インタビュー過程の虚と実 23
- 2 語りのポリフォニー 32
- 3 訝る物語 39
- 4 まとめ——モノログからポリフォニーへ 45

第2章 **なぜ「語り方」を記述するのか**

——読者層とライフストーリー研究を發表する意義に注目して

西倉実季

49

- 1 「語り方」の前景化と「語られたこと」の後退? 49
- 2 聞き手の問いの保存——ライフストーリー研究における記述との違い 52
- 3 社会の縮図としての社会調査——ライフストーリー研究者の役割 59
- 4 聴取の位置の問題化——ライフストーリー研究を發表する意義 66

第3章 インタビューという会話の構造を動的に分析する 青山陽子 75

- 1 問題の所在 75
- 2 集合表象としてのモデル・ストーリー 78
- 3 ゴフマンの多元的リアリティとモデル・ストーリーの布置 83
- 4 結論 94

第4章 メディアのストーリーはいかに生成・展開されるのか

——在日南米人の犯罪をめぐる言説を題材に 酒井アルベルト 97

- 1 社会的行為としてのメディア 97
- 2 在日南米人と「外国人犯罪」 98
- 3 エスニックな亀裂 103
- 4 エスニック・メディアとコミュニティの声 106
- 5 犯罪撲滅キャンペーン 110
- 6 まとめ——語りの社会的空間 112

第5章 ライフストーリーにおける異文化と異言語 張嵐 117

- 1 はじめに——異文化理解と他者理解 117
- 2 異文化体験を聞くこと／書くこと 120
- 3 インタビュー場面における自己呈示とカテゴリー化 130
- 4 おわりに 139

第6章 ライフストーリー研究としての語り継ぐこと

——「被爆体験の継承」をめぐる

八木良広

143

- 1 語り継ぐ活動に取り組む姿勢の問題 143
- 2 証言活動と語り継ぐ活動の社会的状況 147
- 3 語り継ぐ活動における二つの文脈化とその問題 154
- 4 語り継ぐとはいかなることか 165

第7章 戦略としての語りがたさ

——アルビノ当事者の優生手術経験をめぐって

矢吹康夫

171

- 1 自分が聞かれて嫌な質問はしない 171
- 2 「面白い話」の回避 175
- 3 面白くない「ごく普通」のライフストーリーへ 187

第8章 語りにおける一貫性の生成／非生成

倉石一郎

193

- 1 議論の枠組み——「一貫性」の彼岸へ 194
- 2 事例とその背景 199
- 3 事例と分析1 西さんの「長欠児」当事者経験の語り
——「呼び出し」をキーワードに 200
- 4 事例と分析2 上昇移動のストーリー？

- 5 「わたくしごとで恐縮じゃけれども」 208
むすび——不条理の社会学としてのライフストーリー 213

第9章 〈対話〉への挑戦

——ライフストーリー研究の個性

石川良子 217

- 1 はじめに——「対話的構築主義」ではなく「対話的構築主義」 217
2 インタビューを〈対話〉に高める 220
3 〈対話〉に再挑戦する(1) 226
4 〈対話〉に再挑戦する(2) 233
5 おわりに 241

あとがき 249

索引 254

凡例

トランスクリプトの表記記号については、基本的に桜井厚(2002)『インタビュ어의 社会学』(せりか書房)に従っている。本書で使用している記号は下記のとおり。

*…聞き手を表す。**と表記する場合もある。

/…短い同時発話は二重斜線で挟んで挿入する。

(…)…沈黙を表わす。ドット1個(…)につき約1秒を表わす。

(空白)…音声聞き取りにくい場合、丸括弧内は空白になっている。

(…)…文意や仕草などを補っている。

(中略)…トランスクリプトで省略した部分に挿入している。

序章 ライフストーリー研究に何ができるか

石川良子・西倉実季^①

1 「ライフストーリー」から「ライフストーリー」への転回

本書がタイトルに掲げるライフストーリー研究とは、一九八〇年代からライフストーリー研究を牽引してきた桜井厚が、『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』で明らかにした方法的立場を指す。その輪郭は、桜井が「自らのライフストーリー研究の実践的な経験を構築主義の観点に依拠しつつ反省的にとらえ返」すことを通して与えられた（桜井 2004: 374）。ライフストーリー研究を批判的に継承し、発展させたのがライフストーリー研究であることを、はじめに確認しておきたい。

日本におけるライフストーリー研究は、中野卓編『口述の生活史——或る女の愛と呪いの日本近代』（中野編 1977）によって幕を開けた。^②本書は「奥のお婆さん」と皆に呼ばれていた「或る女」の生涯を、彼女自身が「口述」した語りをもとに描き出したもので、そのタイトルには「社会学方法論上の、また、社会調査論上の宣言ともいふべき思い」（中野 [1981b] 2003: 17）が込められている。個人を態度や行為に分

解するか、あるいは類型化してひとまとめにしてきた従来の社会学に対し、中野は何より「個人としての人間」に照準した（中野〔1981a〕2003）。そして、被調査者本人の「話しっぷり」（中野 1977: 291）を最大限に活かしつつ、個人をその人が置かれている状況のなかで全体的に捉えることを目指したのだった。

ライフストーリー研究もまた、オーラリティにこだわりながら「個人がこれまで歩んできた人生全体ないしはその一部に焦点をあわせて全体的に、その人自身の経験から社会や文化の諸相や変動を読み解こうとするものである」（桜井 2003: 14）。このように核となる課題を引き継ぎつつ、ライフストーリー研究とライフストーリー研究で根本的に異なるのは、語りの位置づけである。中野と桜井の共編著である『ライフストーリーの社会学』に収録された両者の論文を見ると、その違いがよく分かる。

中野は時系列的な編集や各種資料との照合によって個人の語りを日本近現代史に位置づけられると考え、そこに歴史認識を更新する契機をも見出していた。語りが過去の出来事の完全な再現ではありえないことを認めながらも、あくまで「現実」に「生きられた生において経験したこと」について語っているのかどうかの「信憑性」（中野 1985: 204）を重視したのである。³⁾これに対して桜井は、語りは過去の事実と必ずしも対応するものではない、という立場に立つ。語りとは「語り手の経験したことに還元されるのではなく、語り手の関心と聞き手（書き手）の関心の両方から引き出された対話的混合体」（桜井 1995: 228）であり、よって語り手と聞き手のコミュニケーション過程を無視しては理解できないと主張したのである。

大掴みに言えば、ライフストーリー研究は、何を語ったのかに重点を置き、過去に起きたことの再構成に関心を寄せる。一方、ライフストーリー研究は、いかに語ったのかや、何のために語るのかに問いをシフトさせ、語っている現在、およびそこから続く未来へと射程を広げた。こうした視角の前提となる認識論的立場は、対話的構築主義と名づけられた。次節では、その基本的枠組みを素描したい。

2 ライフストーリー研究の基本的枠組み⁴⁾

2-1 対話的構築主義——従来のアプローチとの相違点

一九九〇年代後半から質的調査の再評価が進むなかで、ライフストーリー研究とその認識枠組みである対話的構築主義は登場した。調査方法論の活発化は「構築主義の隆盛によって言語（およびその使用）と相互行為への着目があらためて高まって」いたことと関係しており（菊池・大谷 2003: 188）、対話的構築主義も「エスノメソドロジー、構築主義、語り（物語）論などと多くを共有するアプローチ」（桜井 2002: 10）として注目を集めることになった。その視座の新鮮さは、従来のライフストーリー研究法と対照することでも理解しやすくなるだろう。

これまでのライフストーリー研究法には、実証主義アプローチと解釈的客観主義アプローチの二つがあった。前者においては、既存の理論や概念枠組みから仮説が設定され、それを検証するためにライフヒストリーが収集される（Graw 1966=1998）。これに対して後者は、多数のライフヒストリーを収集して帰納的推論を重ねていくことによって、それらに通底する部分、つまり個人の主観を超えた社会的現実が見えてくると考える（Bertaux 1997=2003）。演繹か帰納か、データに先立つ仮説かデータに根ざした仮説かという違いはあるものの、社会的事実はただひとつであり、研究者が適切な方法を採用すればそれに到達できると想定している点で、これらのアプローチは共通している。

これに対して対話的構築主義アプローチは、研究者も含めた人びとのやり取りを通じて社会的現実が構成されると考える。その意味で、ライフストーリーは過去の出来事の単なる表象ではなく、語り手と聞き手との対話の産物である。こうした認識は、テープ起こしや語りの提示の仕方にも端的にあらわれる。語り

手の語ったことだけでなく聞き手の質問や相槌も書き起こし、論文などで引用するとき会話形式のまま提示するのは、語り手のみならず聞き手もまた現実構築に関与していると考えらるからにほかならない。

2-2 ライフストーリーの二つの位相——〈物語世界〉と〈ストーリー領域〉

対話的構築主義では、インタビュアの場面それ自体が社会的現実の構築の現場として捉えられる。したがって、そこで構築されるライフストーリーの内容がインタビュアという相互行為といかに関連しているのかが重要な問いとなる。この問題を具体的に考えていくにあたって桜井が展開しているのが、ライフストーリーの位相に関する議論である。

ライフストーリーには、誰が、いつ、どこで、何を、なぜ、どのようにといった出来事や行為の展開過程を語っている部分と、それらを振り返って現在の心境などを語っている部分とがある。桜井はこれらをそれぞれ〈物語世界〉と〈ストーリー領域〉と呼んで区別した。前者が「出来事が筋によって構成されている語り」であるのに対して、後者は「メタ・コミュニケーションの次元での語りであり、語り手と聞き手（インタビュアー／読者）の社会関係を表わしている」（桜井 2002: 126）。このようにライフストーリーは二つの異なる位相から構成されており、〈物語世界〉は〈ストーリー領域〉に媒介されて成立している。にもかかわらず、これまでのライフヒストリー研究では〈物語世界〉だけが注目され、〈ストーリー領域〉はインタビュア・データとは無関係なものとして扱われてきた。しかし、両者はひとつの言語行為なのであって、切り離しては考えられない。とするならば、インタビュアの場面での語り手と聞き手の相互行為を通じて過去の出来事や経験に対する意味づけがなされ、ライフストーリーが生み出されてくるという側面は、今後のライフストーリー研究において無視することはできないはずである。

ただし、だからといってインタビューで語られることがフィクションであるとか、語り手のパフォーマンスであると言っているわけではない。むしろ桜井は、〈ストーリー領域〉は構築主義的な視点で理解できるにしても、〈物語世界〉は「インタビューの場から一定の自律性をもった物語、過去のリアルさをもつて成立している」(桜井・小林 2005: 6)と留保をつけている⁶⁾。たしかに〈ストーリー領域〉を構築するのは語り手と聞き手の双方であるが、〈物語世界〉を構築する主導権を握っているのはあくまでも語り手である。しかも語り手は、過去に自分が体験したことを「本当のこと」として語る。語り手が過去のリアルな事実として語っているにもかかわらず、そう受けとめないようなライフストーリー・インタビューは無意味とさえ言えるだろう。

2-3 調査者の立場への自覚——リフレキシビティと調査倫理

〈ストーリー領域〉に対する構築主義的な視点は、インタビューにおける調査者の立場や「聞き取る」という営為への自覚を否定なく喚起した。ライフストーリー・インタビューはもともと、語り手の経験してきたことを比較的自由に語ってもらうことを主眼に置いている。しかし、語り手に本当に自由に語ってもらうているかと言えば決してそうではなく、調査者は「一定の構え(志向性)」(桜井 2002: 171)を保持しており、それにもとづいてインタビュー過程を統制している⁷⁾。

ホルスタインとグブリアムがアクティヴ・インタビュー論の中で指摘するように、実証主義においては、調査者の役割は「公正無私な触媒」とイメージされてきた(Holstein & Gubrium 1995=2004)。調査者の構えは正確なデータ収集を妨げるバイアスとみなされ、調査者はそれらを持ち込むことなく客観的で中立的な態度を保つことが望ましいと考えられてきたのである。解釈的客観主義は語り手の「主体性」を重視す

る方法ではあるが、ライフストーリーの産出に関わるもう一方の当事者である聞き手の立場には注意を払ってこなかった(桜井 2004)。これに対して対話的構築主義は、調査者―被調査者関係における権力性やインタビュウ過程の統制の問題を組上に載せる。調査である以上、調査者に何らかの構えがあることは避けられない。しかし、調査者は「インタビュウに際して一定の構えをもっていることを常態であると認め、むしろその構えがどのようなものであるかに自覚的でなければならぬ」(桜井 2002: 171)のである。

語り手と聞き手のコミュニケーション過程を通して語りが生み出されているという構築主義的視点は、このように調査者のリフレキシビティに関する議論を呼び起こす一方で、被調査者に対する認識にも変更を迫った。被調査者も調査者と同じように特定の関心を携えて語りを操っている「能動的主体」(桜井 2002: 76)なのであって、単なる情報提供者でもなければ、調査者が好き勝手にできる研究の客体でもない。したがって、相手の不利益を徹底して回避し、「何のための調査か」という問いかけに真摯に応答することがきわめて重要な課題になってくる。社会学領域で調査倫理の問題に先鞭をつけたことも、桜井の貢献のひとつに数えられるだろう(桜井 2002 第2章、桜井 2007等)。

2-4 語りの社会的コンテキスト——モデル・ストーリーとマスター・ナラティブ

被調査者が「いかに語ったのか」にいったん注目してみると、ライフストーリーを単に個人の主観的なものとするのはいかに複雑な考え方であるかがわかる。なぜなら、そこには個人が体験したことをめぐる語りもあれば、あるコミュニティに共有され、そこでの常識の中に埋め込まれた語りも含まれるからである。さらには、個人が生きてきた、より大きな社会や文化を象徴するような語りもある。その一つとして、コミュニティのメンバーであればただちに了解できるような用語法のことを、桜井は「モデル・ストー

リー」とよんでいる。⁸⁾

ケン・プラマーが指摘するように、これまで声に出されてこなかった新しいストーリーが語られるためには、それを聞いて支持してくれるコミュニティが不可欠である (Plummer 1995≡1998)。このとき、大きな役割を果たすのがモデル・ストーリーである。今まで語る言葉をもたなかった人びとが、モデル・ストーリーを参照することで個人のライフストーリーを語りはじめるのだ。ただし、モデル・ストーリーはそれとは異なる語りの生成にとつてときに抑圧的に作用しうることや、個人はつねにモデル・ストーリーを踏襲して語るわけではないことにも注意が必要である (桜井 2002: 250-9)。

桜井はまた、特定のコミュニティを超えた全体社会において支配的に語られており、「文化的慣習や社会規範を表現するストーリー」を「マスター・ナラティブ」と呼んでモデル・ストーリーとは区別している (桜井 2012: 103)。モデル・ストーリーは、マスター・ナラティブと同一化することもあればそれに対抗する場合もある。とりわけマイノリティのコミュニティにおけるモデル・ストーリーがマスター・ナラティブといかなる関係にあるかは、ライフストーリー研究にとつて重要な問いとなる。

モデル・ストーリーにせよマスター・ナラティブにせよ、そこから個人と社会 (コミュニティや全体社会) とのあいだの同調、抵抗、齟齬、抑圧といったさまざまな関係を読み解くことができる。構築主義的な視点を強調すると、インタビューの場面での相互行為の分析に目が向きがちになるが、それを超えたより広い社会的コンテキストを考慮に入れる必要がある。

これらの視角や概念のもとに提唱されたのが対話的構築主義である。こうした認識論的立場に立つことで、ライフストーリー研究は従来のライフヒストリー研究の問題関心を引き継ぎながらも、同時に大きく転換することになった。

3 ライフストーリー研究はどう受け止められたか

3-1 普及と批判

『インタビューの社会学』以降、対話的構築主義に触発されたライフストーリー研究の成果が発表されるようになった（書籍として発表されたものを挙げると、蘭 2004、山田編 2005、倉石 2007、2009、石川 2007、西倉 2009、張 2011 など）。桜井は一九九九年より定期的に「ライフストーリー研究会」を主催しており、この研究会でもこれまでに三冊の本を出版している。最初の一冊は、二〇〇二年度に「ライフストーリーとジェンダー」というテーマのもとで取り組まれた成果を精選した『ライフストーリーとジェンダー』（桜井編 2003）である。二冊目は、戦後日本の社会変化を人びとの生活経験のライフストーリーから解釈した論文をもとに編まれた『戦後世相の経験史』（桜井編 2006）である。三冊目は『過去を忘れない——語り継ぐ経験の社会学』（桜井ほか編 2008）であり、現在から未来へと生きられた経験を語り継ごうとする人びとの実践を主題に据えたものである。単なる「語る」から「語り継ぐ」へと焦点を移行させることで、ライフストーリー研究の射程を拡張することが意図されている。これらに収録された論文の書き手のほとんどが大学院生や若手研究者であり、『インタビューの社会学』の魅力に引き寄せられて研究会への参加を希望した者たちだった。対話的構築主義のどの部分に触発を受けたかはさまざまであるが、多くの書き手が、実証主義の枠には収まりきらない調査経験との遭遇により、このアプローチにブレイクスルーを見出している。

ライフストーリー研究会が、当初の数人での勉強会から常時二〇人ほどの参加者を見る研究会になっていくと同時に、『インタビューの社会学』のインパクトは研究会の外部にも及んでいった。もともと幅広

い学問領域の成果を土台にした書物だったこともあり、社会学のみならず歴史学、質的心理学、民俗学、日本語教育学など複数分野にまたがって多くの研究者の関心を引きつけ、大きな影響を与えてきた。

若手研究者を中心に対話的構築主義の視点を取り入れた調査研究が徐々に蓄積されるにつれ、ライフストーリー研究の内外から疑問や批判も聞かれるようになった。これらは、桜井自身の方法論的立場に対するものと、その応用の仕方、とりわけ若手研究者による成果に対するものとに分けることができる。桜井の方法論に対する直接的な批判としては、足立重和がライフストーリー研究の批判的継承という対話的構築主義の出自そのものに関わる重要な問題提起をしている（足立 2003）。また、鶴田幸恵と小宮友根によれば、「相互行為としてのインタビュー」という視点の方法論上の含意は不明確であり、対話的構築主義は独自の方法論にはなり得ていない（鶴田・小宮 2007）。

次に、若手研究者に対する対話的構築主義の用い方に向けられた疑問をみていこう。蘭によると、対話的構築主義が質的社会調査法のひとつとして確立された結果、「語り手の声」や「リアリティ」が背後に退いてしまい、「概して、聞き取られたこと〓語られたこと（内容）が生き生きと実感できず、インタビューの語り手の〓人生〓を知ったという感覚がもたらされない」（蘭 2009: 39）。こうした事態が生じた理由として蘭が指摘しているのは、もとの方法論に含まれていた議論の複雑さや個別の文脈が捨象され、いわばマニュアルとして「消費」されてしまったことである。

『インタビューの社会学』は、倉石一郎が絶妙に表現するように「ある種の〓うそ臭さ〓を含んだ転倒した呈示」（倉石 2003: 147）になっている。石川良子によれば、マニュアルとしての消費という事態を招いた一因はこうした呈示の仕方にあると考えられる（石川 2012）。どういふことかという点、最初に対話的構築主義という方法論があつて、それに従つて個々の調査経験が積み上げられたわけではなく、実際に

はその反対で、自身のこれまでの調査経験を構築主義の視点で振り返って見たものに「対話的構築主義」という名前が与えられたのである。ライフストーリー研究に本格的に取り組みはじめた読者は、その蓄積とともにこうした転倒を見破るようになるのであるが、初学者には到底見抜くことができない。そのため、桜井が長年の調査経験のなかで試行錯誤を繰り返しながら編み出した方法論を、どのようなフィールドや問題関心にも汎用できるまさにマニュアルとして受け取ってしまうのである。

マニュアル化とまではいかないにせよ、対話的構築主義を応用する若手研究者にみられる一定の傾向を指摘したものととして、ライフストーリー研究会による論文集『戦後世相の経験史』に対する野上元の書評がある(野上2006)。一定の傾向とは、「聞き取りにおける聞き手の「とまどい」や「ためらい」、「違和感」や調査の「失敗」経験などを通じて、聞き手⇨書き手の実存が叙述のなかにしばしば顔を出しているという「こと」である。野上によれば、こうした論考は読む者に「誠実さ」ゆえのある種の「閉塞感」を与えてくる。「認識における「私」の移動経験を表面化させなければならぬのがライフストーリー研究だとすれば、それはいわば語り手と聞き手⇨書き手の自意識を「相討ち」にさせる」(強調点は引用者による)と言えるが、このことが「閉塞感」を招くというのである。

3-2 批判への応答

これらの疑問や批判をきっかけに、私たち中堅・若手のライフストーリー研究者のあいだで次第に形成されていったのは、次のような問題意識である。ひとつは、『インタビューの社会学』の「つまみ食い」とも呼べるような現状があるのではないか、というものである。対話的構築主義を標榜する研究成果のなかには、トランスクリプトにおいて聞き手の質問に語り手の語りと同じ位置づけを与えたり、調査者の構

えや権力性について自己言及したりといった技法さえとれば、対話的構築主義を実践したことになるのかのような印象を与えかねないものも含まれている。なぜ対話的構築主義なのか、この方法論を用いることでいったいフィールドの何を明らかにしようとしているのか。然るべき検討が省略されたまま、桜井が提示した概念や技法だけが都合よく「つまみ食い」されている現状を問い直す必要性を認識したのである。

いまひとつは、こうした疑問や批判が投げかけられてしまうのは、ライフストーリー研究者の側がみずからの方法論についていまだ十分に説明できていないためではないか、というものである。対話的構築主義をうわべの理解で安易に適用しているつもりはない。「誠実さ」を証明するために聞き手の「とまどい」や「失敗」経験を書いているわけではないし、それらを表面化しなければならぬのがライフストーリー研究であると考えてもいけない。にもかかわらず、マニュアル化しているように映ったり、若手研究者の書くものがまるで判で押したかのように見えたりするならば、それぞれがどのような問題関心のもとで対話的構築主義を用いるのか、その方法的ねらいが必ずしも明確化されていないことの表れではないか。先述した「つまみ食い」的現状についても、ライフストーリー研究者の側のこうした説明不足とまったくの無関係ではないのかもしれない。『インタビュの社会学』の出版からある程度の時間が経過し、自分たちを宛先とする疑問や批判が投げかけられるなかで、若手研究者たちはみずからの方法論により意識的にならざるをえない状況に置かれることになった。

内外からの疑問や批判に対するライフストーリー研究者による最初の応答は、二〇一〇年度の日本社会学大会でのテーマセッションである。「ライフストーリー研究の射程と地平」と題するテーマセッションでは、「相互行為としてのインタビュ」という視点とは何のためのものか（西倉 2010）、調査者の経験を反省的・自己言及的に記述する意義とは何か（石川 2010）、対話的構築主義は歴史経験をどのように扱

うことができるか(仲田2010)などの問いに対し、自身の調査経験を実例としながら答えようとする試みがなされた。翌二〇一一年度の日本社会学会大会でも、「ライフストーリー研究の可能性」と題するテーマセッションが開催され、ライフストーリー研究のさらなる方法的強化に向けて議論が継続された。

これらの問題提起と連動するものとして、小倉康嗣の作品提示論がある(小倉2011)。小倉は、調査過程を詳細に提示する最大の意義を「読者が、ひとつの社会過程たるライフストーリーの生成プロセスを追体験(追試)できるように」(小倉2011:147)促すことに求めている。調査協力者、調査研究者、読者の三者がその社会過程に参加することで新たな社会的現実が構成されていくことこそが、ライフストーリー研究がもたらす「知」であるという。石川良子も同様に、この三者関係に注目して調査者の経験を自己言及的に記述することを意義づけている(石川2012)。調査者の「地殻変動とも表現したくなるような劇的な変化」(石川2012)を描写し、その過程を読者も「追体験」することができれば、読者にも同様の変化が引き起こされ、読者自身の認識を深めることに貢献できるのではないかという。

このように、ライフストーリー研究は何をしようとしているのか、いったい何ができるのかを改めて問い直そうとする作業が始められつつある。しかし、依然として応答がなされていなかったり、曖昧のまま放置されていたりする論点もあり、いまだ十分とは言えない。さらに、研究成果が蓄積されるにつれて、ライフストーリー研究者のあいだでも対話的構築主義の捉え方はけっして一枚岩ではないことも明らかになってきた。